



知って得する、ちょっと差がつく トリビア・コーナー

トリビア研究家 末崎 孝幸

末崎 孝幸氏

1945年生まれ。1968年一橋大学商学部卒業、同年日興証券入社。調査部門、資産運用部門などを経て、日興アセットマネジメント執行役員（調査本部長）を務める。2004年に退職。Facebook上での氏のトリビア投稿は好評を博している。



緑の黒髪とは

「緑の黒髪」、この言葉を何かの本で最初に見たとき「変な表現だなあ・・・」と思っていた。長い間、忘れていたが長じて辞書に親しむようになって本来の意味を知り、日本語の奥深さと美しさを再認識した言葉である。この場合の緑は草木の新芽、または初夏の若葉を意味している。「緑の黒髪」とは、新芽のようにつやつやした見た目に美しい髪のことだ。

せっかくの「緑の黒髪」を染めてしまう若い女性をたまに見かけるが、もったいないことである。

ダヴィデ像の左肩に乗っているのは？

教科書でミケランジェロのダヴィデ像を初めて見たときの驚きは今でもよく覚えている。視線が画面の真ん中に釘付けになったまま、しばらくポカンとしていた。しかし、長じるにしたがって興味はダヴィデが左肩に何を抱えているかに移った。問題が解決したのは10年以上経って旧約聖書の解説書を読んだときである。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

紀元前1000年頃、イスラエル人はペリシテ人との戦いを繰り返していた。ペリシテ最強の戦士・ゴリアテは果敢にも単身でイスラエル軍の前に現れて挑発を繰り返したが、イスラエルの兵はこれを恐れた。従軍していた兄たちに食料を届けるために戦場をおとずれた少年ダヴィデは、ゴリアテの挑発を聞いて奮起し、その挑戦を受けることを決意。ダヴィデは石投げだけを持って出かけた。

ゴリアテはダヴィデを見ると「さあ来い。おまえの肉を空の鳥や野の獣にくれてやろう」と侮ったが、ダヴィデが石を投じるとゴリアテの額に当たり、ゴリアテは倒れた。ダヴィデはゴリアテが持っていた剣を引き抜いてその首を切り落とした。ペリシテ軍はこれを見て総崩れになり、追撃したイスラエル軍は勝利したのである。

ダヴィデが左肩に抱えていたのが「石投げの道具」であったことと、当時10代半ばの少年だったのが分かったとき、私はすでに20代半ばを過ぎていた。



破天荒

「破天荒」はメディアを中心にトップクラスで誤用されている言葉である。

「天荒」とは荒れて雑草などがはびこる天地未開の土地のこと。「破天荒」は中国・唐の時代、最難関である科挙(官吏の採用試験)の合格者が一人も出なかったために人々に「天荒」と呼ばれていた荊州から、劉蛻(りゅうぜい)という合格者が初めて出た。それを「天荒を破った」と言われたという故事による。ここから、今まで誰もなし得なかった事を成し遂げるという意味になったのである。

従って「破天荒」とは前人未到の偉業という意味が正しく、豪快で大胆な、または型破りなという意味ではない。



足を洗う(最初に足を洗ったのは誰?)

昔の僧は修行のために裸足で外を歩いていた。仏教の思想では、寺の中を救いの世界、寺の外を迷いの世界としていた。修行のため裸足で外を歩いた僧は、寺に入る前に足を洗うことで俗世界の煩悩を洗い清めていた。

こうした習慣から「足を洗う」は悪いことをやめる意の言葉になったのである。しかし、現在ではそこから変化して、善悪関係なく何かをやめるときに使われるようになっている。

元の木阿弥(の由来)

戦国時代、大和郡山の城主・筒井順昭が若くして病死、跡継ぎの息子順慶は2歳と幼少であったため、遺言どおり順昭の死を隠すことになり、替え玉を置いた。死んだ順昭の代わりに姿や声の似た貧乏な僧侶・木阿弥を寝室に寝かせて、順昭がまだ生きているように見せかけたのだ。

息子の順慶が成長をした後、順昭の死を公表したので、木阿弥は用済みとなり、殿様暮らしから、元のしがない僧侶・元の木阿弥に戻ったという。このことから、一度は良い目にあった者が、或いは物事が元の振り出しに戻ることを「元の木阿弥」というようになったのである。

なお、筒井順慶は「洞ヶ峠」(日和見すること)の語源にもなった武将である。

柿(かき)と柿(こけら)の違い

本などの印刷物で見ると、「柿(かき)」と「柿(こけら)」という字の区別がつかない。それどころか、同じ字に見えてしまう。

しかし、実際は「かき」は旁(つくり)が、「市=なべぶた+巾」、「こけら」は旁の縦棒が突き抜けている。字画数だと「柿(かき)」が9画、「柿(こけら)」は8画になる。明らかに異なる字だ。

なお、「柿(こけら)」は材木を削ったときに出る切りくずのこと。新築や改装の工事の最後に、屋根などの「こけら」を払い落としたことから、完成後の初めての興行を「柿(こけら)落とし」と言うようになったのである。



かき 柿
こけら 柿

下馬評(の語源)

江戸時代、上級武士は馬に乗ってお城に通っていた。城門には馬を下りる下馬先というところがあり、武士はそこから歩いて城内に入っていた。家来たちは、主人が戻ってくるまで下馬先で待っていなければならない。待っている暇な時間に彼らはうわさ話、世間話に花を咲かせたという。大名の国替えのうわさや藩内での異動など、今も昔も関心事は人事関係というわけだ。この下馬先での世間話、評判が「下馬評」の語源となったのである。

ペンネームの由来いろいろ

- ・阿久悠:本名、深田公之(ひろゆき)・・・「悪友」をもじった。
- ・阿佐田哲也:本名、色川武大・・・麻雀狂で「朝だ、徹夜」からつけた。
- ・有栖川有栖:本名、上原正英・・・ 通学途中に目にとまった「有栖川宮邸跡」の碑がペンネームの由来。
- ・伊集院静:本名、西山忠来(帰化前はチョ・チュンレ)・・・広告代理店に入社予定だった女性のコピーライターに付けられるはずだった名前。作詞家としての名は伊達歩。
- ・泉鏡花:本名、泉鏡太郎。
- ・江戸川乱歩:本名、平井太郎・・・エドガー・アラン・ポー(Edgar Allan Poe)に由来。
- ・大佛次郎:本名、野尻清彦・・・鎌倉の大仏裏に住んでいたから。大仏を太郎とするなら、自分は次郎にあたると思った。
- ・北杜夫:本名、斉藤宗吉・・・トーマス・マンに私淑していた宗吉はマンの小説『トニオ・クレーゲ



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

ル』から「杜二夫(とにお)」とした。しかし、「二」を外して「杜夫」にし、姓は東北大医学部出身なので「北の杜」から採った。

- ・司馬遼太郎:本名、福田定一・・・中国の「司馬遷」に遼かに及ばない男(太郎)の意。
- ・城山三郎:本名、杉浦英一・・・結婚後住んだ家の住所が名古屋の城山。転居が三月だから「三郎」となった。
- ・立原正秋:本名、キム・ユンキュ・・・亡くなる2ヶ月前に改名を認められ、立原正秋が本名になる
- ・夏目漱石:本名、夏目金之助・・・中国の故事「漱石枕流」(負け惜しみの強い意)から。
- ・西村京太郎:本名、矢島喜八郎・・・「西村」は尊敬する先輩の名前、「京」は東京生まれで「太郎」は長男だから。
- ・新田次郎:本名、藤原寛人・・・出身地である長野県上諏訪角間新田(しんでん)出身の次男という意味。
- ・藤沢周平:本名、小菅留治・・・藤沢は妻の実家のある地名から(鶴岡市藤沢)。「周」の字は妻の親族の名前から採った。
- ・樋口一葉:本名、樋口なつ・・・「一葉」というのは達磨が乗って渡海した蘆(芦)の一葉にちなんだもの。
- ・二葉亭四迷:本名、長谷川辰之助・・・小説嫌いの父(江戸詰めの尾張藩士)から「くたばってしめえ」と言われたことから。
- ・三島由紀夫:本名、平岡公威・・・三島を見出した国文学者の清水文雄が命名。修善寺への編集旅行の際、「三島」を通ったこと、富士を見て「ゆき」を連想したという。
- ・森鷗外:本名、森林太郎・・・「舞姫」を発表したとき、友人の斉藤勝寿から「鷗外」の号を借用したもの。